

ねがいのいえニュース 第5号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2004年9月13日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木 185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



暑くて長かった夏がようやく終わりました。みなさまお元気でしたか？

オープンから1年が過ぎたねがいのいえは、夏休み中も毎日満員で超多忙でした。スタッフがひとりも倒れることなく、大きな事故もなく過ごせたことにほっとひと安心しております。

この2ヶ月の間に新しいスタッフが3名増え、ボランティアから通い始めて成長した主婦や学生の方たちがパートとして働いてくれるようになり、長い夏休みも毎日たくさんの方が支えてくれました。1年間順調に歩んできたねがいのいえでしたが、4月以降ふたりのスタッフが退職するという不運にも見舞われました。退職したスタッフの思い出を綴らせていただきたいと思います。

4月の末、スタッフの川村昌子が東北新幹線に乗って実家へ向かっていた。祖母が脳梗塞で倒れたというのは後日聞いた話である。

いつもおいしい料理を作ってくれていた彼女に、家庭でおいしい食事を食べて育ったんだねと話したとき、「うちは母が仕事していたからおばあちゃんがいつも作ってくれてたんです。」と話していた折にも、おばあちゃんを大切にしたい強い思いが感じられた。かわいらしい容姿に似合わない男性的な強さを秘めた彼女らしく、決断は早かった。実家へ戻る意思を理事長に伝えたのはそれから10日後である。

誰よりも子供が大好きで、子供たちからも愛されていた彼女がいなくなるのは、寂しく悲しいことだった。しかしスタッフの思いも大切にするねがいのいえが彼女を引き止めることはできない。こんなに早く大切なスタッフを失うことになったのを、ただただ不運だったと思うのみである。

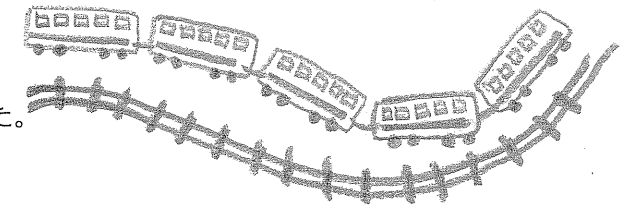
なおみちゃん

オープンからまもない頃、お母さんと一緒に入会の手続きにやってきたなおみちゃんは、

中学生ながら小柄で甘えんぼのかわいらしい女の子。まだ利用が少なかった昨年の夏休み、毎朝8時から利用に来た。早い出勤は家が近い川村の仕事である。初めての利用の日、なおみちゃんの興味あるものを探るために、川村がいろいろな遊びを試していた。お絵かきやボール、シャボン玉など次々と繰り出す彼女に、ふだんはクールなのに子供にはこんなにも夢中になる人なんだと感動した。その次には凧あげをしようと言って、一緒に住宅街を走り始め延々と回っていた。毎朝早くやって来るなおみちゃんはすっかり川村の担当となった。

今年とは対照的に寒い雨の日が多かった昨年の夏。朝から冷たい小雨の降り続くある日、川村がなおみちゃんと電車で行きたいと言う。会話の中で電車が好きなことを知り、どうしても乗せてあげたかったようである。短い利用時間にもかかわらず、指扇駅から出かけて行き、池袋で食事と水族館に行って帰ってきた。思いのほか費用がかかってしまったことを後悔していたが、後日ご家庭からうかがったところ、とても喜んでいただいていた。費用がかさんでしまったことは注意したものの、利用者の好きなことをかなえてあげたいという強い情熱は、とても嬉しかった。

最後に会ったときに退職することを伝えると、抱きついて大泣きしてくれたなおみちゃんだった。



えりちゃん

えりちゃんと川村が会話している。えりちゃんという言葉が自分には聞き取れない、そんな時でも川村はちゃんと聞き取って会話を弾ませている。肢体不自由のえりちゃんは、言語に障害があり慣れない人にとっては聞きにくい。聞き取れない時にわかったふりをするのもままあることだが、わかるまでしっかり聞いてあげるのが川村の姿勢だった。

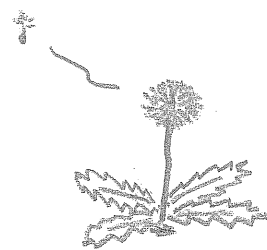
えりちゃんとスタッフがまだお互いに慣れていなかった頃、午前中一緒に遊んでから昼食のしたくをし、誰と食べたいかをきいた。すると、「まあちゃん」とはっきり答えた。みなはっとして振り向いた。その日は休みだった川村に翌日その話を伝えた。その頃からえりちゃんの川村を慕う気持ちが誰にもはっきりとわかった。

川村が退職するといううわさを聞いて来てくれたえりちゃん、最後に自分で選んできたというハンカチをプレゼントしてくれたそうである。



はるかちゃん

学校から自宅まで電車で帰る練習をするという仕事を、昨年の9月から今年の1月まで続けた。地元の普通学校から養護学校へ転校したというはるかちゃんの下校に付き添うため、女子スタッフが毎日交替で出かけた。一見健常の子と変わらないように見える、ボーダーラインのお子さんである。



毎日一緒に電車に乗るので、スタッフととても親しくなり、いろいろな会話があったそう
うだ。毎日利用しているのに、ねがいのいえに来る機会はなかったはるかちゃん、みんな
と遊びたいという希望がようやくかない、冬休みに遊びに来てくれたときには、大サービ
スしようと、女子スタッフふたりと一緒に弁当を持って出かけた。

利用急増で毎日の付き添いが難しくなったことを伝え、1月に入ってからひとりで電車
に乗る仕上げの練習をした。もうすぐこの仕事を終え、毎日は会えなくなる日を数日後に
控えた頃、「今日はとても感動しました。」と川村が語ってくれた。「転校したばかりの頃、
みんなに意地悪したんだ」「私いつか優しくなれるかな」とはるかちゃんが話してくれたそ
うである。

ボーダーラインの障害を持つ子にとって、ついていけなかった普通学校から養護学校へ
移った時に、よく起こる出来事かと思う。自分を振り返り見つめなおすことができる彼女
の心は、すでに十分に優しい女の子である。そんな子供たちの
言葉に、私たち大人は頭がさがる思いを感じ、これからの彼女
たちの人生に幸せが待っていて欲しいと願わずにられない。
そしてそんな会話が交わされた事実が、日々の関わりを大切に
積み重ねてきたスタッフたちの姿勢を感じさせるのである。



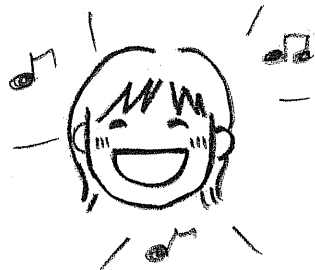
ゆうひちゃん・あっくん

難聴で視力も低いというゆうひちゃん。初めての利用でスタッフも慣れていない子だっ
た。どんな遊びが好きなのか手探りの一日である。午後のひととき、川村がゆうひちゃん
を抱っこしてみんなに言った。「歌を上手に歌えるんですよ。」そして「ま・い・ご・の・
ま・い・ご・の・こ・ね・こ・ちゃ・ん」ゆっくりと歌い出すと、確かにゆうひちゃんの
小さな唇が少しずつ動き、かすかな音を発していた。

わずかな時間でいろいろ試し、ひとりひとりの子供のできることを探して一緒に遊ぶそ
の感性は、天才的だった。

電車と自動車と歌が大好きなあっくんが、川村と一緒に歌っている。「大型バスに乗って
ます。・・・お隣へ、お隣へ、・・・」リズムに合わせて、ふたり同時に首を横へ振る。見
事なタイミングだった。

あっくんがあっ、あっ、と言って体のどこかを触るたびに、その意味を察して求める歌を
歌い出す川村。「変な・顔の・比べっこしよう」と歌いながらふたり一緒に振り付けで遊ん
でいる。どうやって教えたのかと尋ねると、「あっくんがはじめか
らやっていたのをかぶせてるだけです」と言う彼女。そんなひと
つつひとつの動作を観察し意味を察して、一緒に遊びにしまう
のが彼女の能力だった。



しゅうくん

ジャニーズ jr.のように2枚目の男の子しゅうくん。開始したばかりの児童デイサービス
を当初から利用し始め、すっかりスタッフに慣れてくれた彼は、まるでねがいのいえの宣
伝マンのように、学校でも「ねがいのいえ」と連呼してくれた。

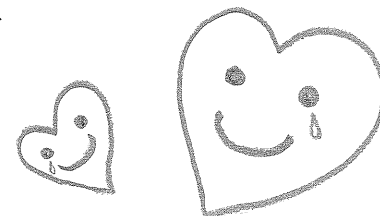
公園遊びが好きな彼だったが、しだいに寒い季節になると外へは行きたがらず、「お・ふ・
と・ん」と言っでは布団を取り出してくるまっっていることが多くなった。みんなで寝転が
りながら抱っこしたりにらめっこしていた毎日。ある日、いつものようにしゅうくと顔
を寄せ合っていた川村が跳ね起きて嬉しそうに叫んだ。「大好きって言った。」

その頃から、しゅうくんの言葉が増え始めているのを感じるようになった。

いつも一緒だった川村にしゅうくんも一番心を許していたようだった。退職の日が近づ
いた頃、お別れすることを伝えた川村に寂しそうな表情を見せたしゅうくん。

最後の日の夕方、玄関で川村がずっと抱きしめていた。片言の彼が、「お・わ・か・れ」
と言い、見送る川村を振り返って「い・っ・て・き・ま・す」と言って帰った。

翌日は何事もなかったようにやってきたしゅうくんだったが、
他の女子スタッフと向かい合っ、しばらくじっと抱きついて
いた。それは、自分の心にやってきた危機を彼なりに乗り越え
ようとしていた行為なのかもしれない。



オープンから数ヶ月、利用が少なく寂しかったころを乗り越えて、現在の多忙なねがいの
いえになるまで一緒に歩んでくれたスタッフたち。彼女たちが、利用する子供たちひと
りひとりの心を満足させてくれたから、今のねがいのいえがある。本当に感謝の気持ちで
いっぱいである。

おばあちゃんに回復の兆しが見え始めた川村家で、どんなりハピリをさせたらいいかと
いう話題になったとき、本人にとって何が一番いいのかを考えることが大切なんだと、ひ
とり彼女が熱く語った。福祉職員としてのその高い才能が、これからは大切な家族を支え
るために発揮されるよう、彼女の未来に大きな幸せが降りてくるよう、スタッフみんなが
祈っている。

別れの日から数日後、バギーを押して花の丘を散歩した。1週間前に彼女と子供たちの
写真を撮った同じ場所で、あの時には咲いていなかった花がもう咲き始めているのを見つ
けた。川村に負けないうくらい心優しいスタッフが加わり、2年目を迎えたねがいのいえ。

初夏の陽射しを浴びながら、新しい季節の訪れを感じていた。